

30 年をふりかえって

前保健管理センター保健婦 中 島 百 合 子

センターの受付でにっこりとおじぎをする人がいる。どこか見覚えのある顔だが誰かなと一瞬あちこちの職場が私の脳裏をよぎる。すこし話をしているうちに 20 数年前の卒業生の A さんであることがわかり、すっかり貫禄のついた紳士で見違えてしまったが、笑顔の中の幼い表情が学生の頃を思い出してなつかしい。あの頃は、豪快な若者がよくクラブ活動で負傷し、傷の癒えるときがなく、その手当てに保健室に日参してきた。目をそむけるようなむごい怪我もあったが、ひるむことなくよく頑張っていた。あの元気な連中もこの変動の激しい社会で各企業の幹部社員として活躍していると聞き今更ながら歳月の流れの速さを感じる。変わった学生がいて、いつも素足で生活し、足の裏が靴の皮ようになっていた。傷の処置をしているときメスの刃が欠けて困ったこと、その他ユニークな学生が多く、保健室利用者も多彩であった。

私は県立彦根保健所開設以来 10 年間保健婦業務に従事し退職。昭和 30 年 11 月に滋賀大学学生部厚生課保健婦として就任した。古い校舎の 2 階の一角の大きな教室を保健室として任された。机が一つ置かれただけの殺風景なものだった。只、入口に大きな体重計があってそれだけが保健室であることを示しているようだった。過去 10 年間医療関係者がいなくて、何の設備もなく器具もなかった。何から手をつけようかと啞然とした事をおぼえている。

先ず、応急処置の必需品、器具、健康相談に必要なものの整備にあたる。あせって行事を企画しても設備の不備で行き詰まりどうしようもなかった。健康相談を担当する学医は代々の彦根市市立病院院長に依頼することに決まり、初代川脇茂一院長が週 1 回健康相談を担当して下さることになった。威厳のある近寄り難い先生だったが、和やかな雰囲気で行われていた。先生が逝去され、後任の院長古武弥六先生が引き継いで学医として就任されることになり、健康相談はもとより保健管理業務の全般にわたり指導された。また学生・職員で医療を要する者については、管理職・教官がたの業務に支障なく受診治療を受けられるよう取り計らっていただいたお陰で、ともすれば怠りがちになる継続治療も治癒まで継続することが出来喜ばれていた。

31 年に厚生課長が赴任され、代々の課長、係長の御骨折りで改装工事、簡単な検査が出来る設備等徐々に施工され、保健室らしい趣を添えてきた。また、学生間では「友愛会」が結成され、保健問題に熱心な学生が、いろいろな問題を持ち寄って保健室を訪れ企画したり、検討したり、仕事上大変参考になった。友愛会の役員はスポーツクラブ学生に呼びかけ保健行事にすすんで応援してくれてとても嬉しかったことを覚えている。センターが設置し軌道にのりつつある 55 年に学医を退職されたがその後も同様何かとご無理をお願いしてきた。私の就任した頃は結核の患者数も多く滋賀大学でも毎年結核その他の病気で療養中の学生が復学し、その後の療養指導や生活指導をうけるため保健室の利用がかなり多かった。

また、そのころ滋賀県の結核の権威者である結核療養所比良園々長吉村英一先生に依頼し、"結核について" の講演と映画の会を友愛会と共催で開催し多数の学生が参加し熱心な吉村先生を囲んで盛り上がった。インフルエンザの予防接種も友愛会が経費の負担を申し出て学生に呼びかけ多数の学生に接種すること

とが出来た。

昭和 41 年に文部省が全国の国立大学に、保健管理センターを設置する方針を打ち出し、昭和 53 年に当大学にも保健管理センターの設置が決まり、所長とカウンセラーの先生方が専任として着任されることになった。所長は保健管理医も兼任されるので業務内容も幅広く活動できることになり活気を帯びてきた。そして 55 年 4 月何回かの移転を経て、新築の建物に落ち着き、新しい器具、検査器具も整備され徐々に内容も充実し、定期健診・事後指導等先生方のご指導等行き届いた処置がされていた。保健管理センターになって 9 年実り多い歳月を経て 62 年退職し、今、自身の、老後の健康管理と向き合っているこの頃です。

昨年の麻疹の流行に驚き、時代の変遷とともに対象疾患も多く、ご苦勞も多いことと思います。ご活躍を祈念いたします。

平成 20 (2008) 年 6 月